会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

心に残った授業

札幌市医師会
さっぽろ幌西クリニック
笠井（かさい）　武史（たけふみ）

自分が高校生の時の話です。

世間はバブルに入ろうかといったところでした。理系クラスなのにかっこつけて社会は世界史を選択したのですが、あまりに覚えることが多くて早々に撤退。倫理社会を選択し直したのでしたが、そこで出会ったH先生は生涯忘れることのできない先生となりました。

なにせ噂では特攻隊！の生き残りだとか。先生も数々の武勇伝を披露されるのですが、何しろマッチョ礼賛なのです。「いいか、お前らなんぞこの腕でひとひねりだ！」とばかり立派な上腕二頭筋を（女子もいるのに……。いや、むしろいるからか？）ご披露されるわけです。先生の控室にはダンベルやベンチプレスが置いてあり、日々鍛錬されていたようです。（私物持込？）また、「胸板が厚くなければ男じゃねえ！」（令和の今ならちょっと控えたい表現です……）と言われるものですから、当時空手部に在籍していた自分もお言葉に甘えてベンチプレスを挙げに行っていたものです。しかしながら、おそらくCOPDであったのでしょうか、呼吸器系があまりよろしくなく、授業にマイクとラジカセを持ってこられ、か細い声で授業を進められたこともありました。

そんなH先生が宿題として哲学書を読んでこいといわれるのですが、「まずは原著だ！」と。まあ、そんなこと言ってたらラテン語を一から勉強しないといけないのですが、そこは岩波文庫でなんとか。ですが、プラトンやアリストテレスから始まってデカルトやカントくらいまではなんとか薄い本で頑張ってはみました。それ以降の哲学書はもう白旗です。授業ではカントの定言命法、「汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として妥当し得るように行為せよ」というくだりは何度も繰り返し言わされたものです。当時、POPEYEかなんかの雑誌を読んで、西海岸風ファッションてのはどうすんのよ？とか考えていた私なんかにはなんのことか全くわからないまま。ただお経のように繰り返していたのです。「なんだい、お天道様が見てるよって話じゃないのかよ？」などとさらにアホな解釈を重ねておりました。

しかし、「特攻隊」「マッチョ礼賛」「ベンチプレス」「立派な上腕二頭筋」などとどうもカントの相性がわからないのです。世はバブル前夜で、徐々に金ピカムードが漂い始めています。街に流れていたのはやたらと明るい（今や懐かしの）80年代ポップスやロック。H先生が立派な体躯で、マイクとラジカセ持参し、か細い声で哲学の授業を進めるのを見て、なんともよくわからない感情を抱いたものです。戦中の限界状況を経て、戦後の価値観の転換を余儀なくされ、なお見えてくるものがあるのか。この、ねじれた宙ぶらりんな雰囲気にあって、私には俄かにはわかりかねる、なんとも矛盾を抱えた存在に見えたのでした。しばらくして日本経済もバブルに本格的に突入した後に、あっけなく弾けてしまいました。個人的にはバブルの恩恵は全くなく、大学は九州にあって、サークルの飲み会ではお湯割りの芋焼酎を飲んだくれる、サンダル履きのまさにイモ兄ちゃんでした。結局、西海岸風ファッションとは無縁のまま今に至ります。

しかし、思い返せば、いつの時代にも通じる真理があるはずなのだとホームルームと部活だけは帳尻合わせの浮足立った高校生活を送っていた私に仰っておられたように思うのです。すぐにはわからない、今もってわからない、役に立つかどうかもわからないけれど、近年重要視されているまさにリベラルアーツであったように思います。